

埋文にいかた

No. 57
2006. 12. 20

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

18年度発掘調査遺跡の紹介

窪田遺跡

(岩船郡神林村大字南田中字窪田1252ほか)

窪田遺跡は越後平野北東部を流れる荒川右岸の低湿地に位置します。日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成18年4月から11月にかけて約16,700㎡を発掘調査しました。

遺構は調査区内の東側を流れていた旧河川の西岸に沿って島状に検出されました。遺構の種類と数は、柱材の残る打ち込み柱式建物6棟(2か所の柱材の検出総数約90本)・井戸23基・土坑13基・ピット60基・溝6条・杭列12列、ほかに旧河川4本(支流含む)です。

遺跡の南側を南西から北東方向に横断する旧河川内と旧河川西側周辺で、江戸時代を中心に機能した約1,200本の3列の杭列群を中心とする施設が検出されました。杭列間は5m～15mを測り、河岸に並行して検出した杭列の長さは、最長のもので約50mに達しています。特筆すべきは河川が調査区東壁にぶつかる手前で、南側の2列がともに1m程度内側に張り出し(杭列間5m)、川底には径5cm～30cmの石が敷かれていたことです。この杭列を含む施設の性格は、護岸目的のほかに漁撈関係の施設などが想定されます。また、旧河川の北東に検出された井戸の埋土からは、漆器の椀・鉢、木器の小皿、木製の人形のほかに小刀など、13世紀頃と考えられる遺物がまとまって出土しました。県内では調査事例の少ない、井戸で行われた祭祀行為の状況を物語る貴重な資料です。

本遺跡は遺物の特徴や放射性炭素年代測定(AMS)から、複数の時代(古墳末～古代前半・中世・近世)に人々が生活していた集落であることが次第に明らかになってきました。この地域の貴重な調査事例になるものと考えられます。

(国際航業(株) 前川雅夫)



河川漁撈関連施設?



打ち込み柱式建物検出状況



井戸半截状況

おおだて
大館跡
 (村上市天神岡)

大館跡は日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成18年8月から調査を実施しています。古くから中世の館跡と言われていましたが、文献史料はほとんど残っておらず、本格的な調査は今回が初めてです。村上市天神岡地区の東端に位置し、館の本体は1辺が約100mの方形区画をなしています。館の周囲は土塁と堀で囲まれていたと考えられており、今回はその北東部を調査しました。

出土した中世の遺物には、珠洲焼・越前焼・瀬戸焼・青磁などがありますが、主体は15世紀頃の珠洲焼です。また、旧表土からは縄文時代前期後葉を主体とした遺物が出土しています。

中世の遺構は土塁や空堀、川跡などが見つかりました。頂上部の土塁(写真1・2)は標高約28mで、北側の空堀の底面との高低差は約8mあります。土塁や空堀は東西に延びる自然丘陵を利用して造られ、丘陵斜面には切岸が確認できます。土塁(写真2)は旧表土から高いところで約3m盛られており、空堀(写真3)は地山を1m前後掘り込んでいます。調査区を南北のラインで見ると、土塁が3つ、空堀が2つ検出され、小谷川を堀と考えると土塁と堀が3つずつ構えられていた様子が伺えます。また、縄文時代と考えられる遺構としては、丘陵頂部の旧表土から2mほど掘り込まれた位置にフラスコ状の土坑(写真4)が見つかりました。

今回の調査により、大館跡には戦国時代の山城を思わせる非常に強固な防御施設が構えられていたことがわかりました。遺構の規模や堆積状況から、短期間になかなりの労働力を費やして構築されたと推測されます。出土遺物は13～16世紀にかけてのものがみられますが、大館跡の存続時期や館主などについては今後の検討が必要です。

(加藤建設(株) 北村和穂)



1 調査区北側全景



2 頂上部の土塁断面



3 空堀完掘状況



4 フラスコ状土坑半掘状況

せいぶ 西部遺跡（04北区） （岩船郡神林村大字牛屋字西部1192ほか）

西部遺跡は、越後平野の北部を流れる荒川右岸の低湿地に立地しており、現在の荒川河口から約2km内陸に位置しています。遺跡の標高は2.5m前後です。

調査は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成16年度に開始し、今年で3年目になります。調査範囲の中程には農道が東西に横断しており、便宜上、その南側を「南区」（平成16年度調査終了）、北側を「北区」（調査継続中）と呼称しています。

北区の面積は約4,500㎡で、中世（、 ・ 層）から古代（、 、 、 、 a層）にかけて7枚の文化層（人々が生活していた昔の地面）が確認され、長期間にわたり断続的に人々の生活が営まれた遺跡であることがわかりました。出土遺物からみた主な文化層の時期は、中世が12世紀後半～15世紀代、古代の層が10世紀前葉、同じく層が9世紀中葉です。

層からは、昨年度の調査で、かんえいこうぼう官営工房の可能性のある大型の掘立柱建物が2棟見つっていますが、今年度の調査で、その北側からほぼ同様の建物をあらたに2棟（SB2020・SB2200）検出しました（写真1）。いずれも梁間1間型と呼ばれる構造をもつもので、建物の内部からは鍛造鍛冶炉や漆紙などが見ついています。前者と後者の建物は柱の立て方に違いが見られます。前者は柱穴を掘って柱を埋めて立てていますが、後者は柱の下端を杭状に尖らせて地面に打ち込む、打ち込み柱方式をとっています（写真2）。

層からは、2間×2間の掘立柱建物2棟、建物内部に鍛造鍛冶炉をもつ区画溝を伴う建物などが見ついています（写真3）。また、層からは水田が見ついています（写真4）。出土遺物がないため、帰属する時期は判然としませんが、上下の文化層の時期差から概ね9世紀前半と推定されます。

今後、本遺跡における最も古い文化層である a層を発掘して、調査を終了する予定です。

（有山武考古学研究所 湯原勝美）



1 掘立柱建物SB2020



2 同左 打ち込み柱検出状況



3 建物SX3030



4 水田

平成18年7月から12月にかけて、糸魚川市田伏地区の日本海を望む丘陵上および谷間で、二つの事業に関わり、隣接する4遺跡を調査しました。

<一般国道8号糸魚川東バイパス関係>

よこ
横マクリ遺跡
(糸魚川市大字田伏字横マクリ)

遺跡は丘陵を開析する沢の開口部付近に位置し、標高約6mを測ります。

遺跡からは古墳時代前期(4世紀)の遺物が出土しました。土器は甕・壺・高杯たかつきなどの生活用具が見つかっています。玉類は勾玉まがたま・管玉くだたまの未成品のみで、ほかにそれらの材料となる滑石などの原石や製作の際に生じた石屑いしくず、製作に用いたとされる砥石といしも出土しました。これらのことから本遺跡は、玉作りが行われていた遺跡と言えます。

また、遺物が一定の範囲から集中して出土していることから、10か所ほどの「遺物集中区」を認定しました。これに隣接して木の根株が検出されましたが、現在のところこれらの関連性については不明です。しかし、「遺物集中区」が当時の人々の生活の場であった可能性も考えられるので、調査・整理作業を進めていく過程で、これらの関連について明らかにしていきたいと考えています。



遺物集中区

(株みくに考古学研究所 桑原 健)

やまぎし
山岸遺跡
(糸魚川市大字田伏字山キシ)

遺跡は北に向かって緩やかに傾斜する沢の中に立地し、標高9~11mを測ります。土層観察の結果、度重なる土石流に見舞われた土地条件であったことが分かりました。

遺跡からは平安~鎌倉時代(12世紀後半)の遺構・遺物を検出しました。遺構は、柱穴150基以上・川・溝・焼土・杭列などがあり、南東から北西に流れる川の東側に集中します。特に注目されるのは、棒状・板状木製品を地面に突き刺した遺構が多く発見されたことです。中には、ピット(柱を抜いた後の穴か?)をめぐらして、数十本の棒状木製品を様々な方向から突き刺した遺構もありました。さらに、大量の木製品やけれきや焼礫・トチノキの実などを含む遺物集中部も検出しました。

遺物の多くは木製品で、曲物まげもの・槽おけ・漆器しっき・下駄げたなどの実用品のほか、人形ひとがた・刀形かたながた・舟形ふながたといった祭祀具も出土しています。陶磁器では、珠洲焼すず・越前焼えちぜん・常滑焼とこなめの国産品に加え、舶来はくじの白磁も見つかりました。

調査は継続中であり、遺跡の性格などについては今後の整理・検討を待たねばなりません。しかし、特徴的な遺構や遺物のあり方から、祭祀や信仰に関わる遺跡の可能性が高いと推定しています。

(株みくに考古学研究所 實川順一)



多量の棒状木製品を突き刺した遺構

<北陸新幹線関係>

やまぎし
山岸遺跡

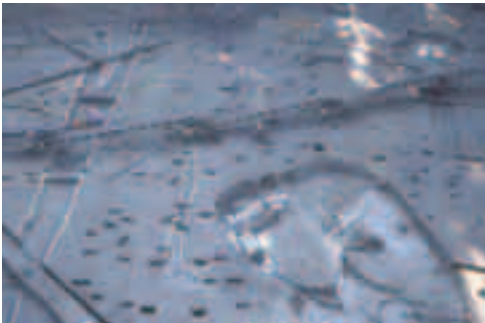
(糸魚川市大字田伏字山キシ863ほか)

遺跡は丘陵に挟まれた谷の中に位置し、標高15～21mを測ります。調査によって、平安時代から鎌倉時代にかけて営まれた遺跡であることが分かりました。

平安時代の川跡 現地表面の1.5～2m下から平安時代の川跡を検出しました。川は調査区内を蛇行しています。川の中からは須恵器・土師器・製塩土器や木器（漆器椀・板材など）が見つっています。

鎌倉時代の建物跡 平安時代に流れていた川は鎌倉時代には埋まったと考えられ、川の上から建物跡が発見されました。建物は桁行9間(18m)もしくは10間(20m)、梁間3間(6m)の掘立柱建物で、鎌倉時代としては大規模です。柱の一部が残っている柱穴もあり、柱には丸太材と角材がありました。また、建物の周囲を方形に巡る可能性が高い溝跡が見つかりました。溝の幅は広いところで約1.2m、深さは約70cmあります。

(春日真実)



鎌倉時代の建物跡



作業風景

ふかだに
深谷遺跡

(糸魚川市大字田伏字深谷525-丑ほか)

遺跡は東西に細長い丘陵上に位置し、標高31～33mを測ります。調査によって、縄文時代早期中葉～前期中葉(7,000～6,000年前)の遺構・遺物が見つかりました。

主な遺構は、焼土や炭化物が厚く堆積する土坑、人頭大や拳大の焼けた石が置かれた集石遺構、道状遺構です。道状遺構は2条検出され、丘陵を南北に横断するものは幅2m、深さ0.4mの溝状の形態で、底の部分がほぼ平らに掘られています。調査区の南端を東西に走るものは幅1mで、北側が深く急に、南側が浅く緩やかに掘られています。遺物は深鉢形の土器や石鏃・礫石錘・磨製石斧・石匙などの石器に加え、装身具の滑石製垂飾や耳飾が出土しています。

今後は調査の成果をもとに、周辺遺跡の事例との比較を通して遺跡の性格を明らかにすることが課題となります。(株吉田建設 細井佳浩)



全 景



集石遺構

埋文インフォメーション

第13回遺跡発掘調査報告会終了報告

去る8月5日(日)、胎内市産業文化会館において第13回遺跡発掘調査報告会を開催しました。当日は事業団が調査した6遺跡について調査報告を、この6遺跡を含む13遺跡について出土品および写真パネルの展示・解説を行いました。また、胎内市教育委員会 水澤幸一氏による講演「胎内市発掘15年」と、出土品・写真パネルの展示・解説も同時開催しました。夏季開催は初めてでしたが、県外からの参加者を含む367人が来場し、調査担当の発表や説明に熱心に耳を傾けていました。

なお、当日配布した資料をホームページに掲載しました。こちらもぜひご覧ください。



受付(エントランス)



展示会場

現地説明会報告

7月8・9日の近世新潟町跡^{きんせいにいがたまちあと}を皮切りに、17遺跡で現地説明会を開催しました。遺跡に対する関心の高まりから参加者数は年々増加する傾向にあり、今年度は延べ3,573人(12月現在)にのぼりました。当日は検出された遺構や出土した遺物について調査員から説明があり、参加者は写真を撮ったりメモを録ったり熱心に見学していました。

各遺跡ではさらに調査、整理作業を進め、遺跡の性格等を明らかにしようと努めています。第14回報告会でその成果を報告しますので楽しみにお待ち下さい。



窪田遺跡(神林村)



岩ノ原遺跡(上越市)



県内初例のナスビ形農耕具

ナスビ形農耕具とは

今回は平成16年に発見された「ナスビ形農耕具」についてお話しします。これは農耕具の鋤身・鍬身に共通の特徴的な形態で、「ナスビ形」とは、野菜の「なす」を縦割りにした形をしていることから名づけられました。

ナスビ形農耕具の出現と伝播

このナスビ形農耕具は、近畿地方を中心に、弥生時代後期から古墳時代後期の遺跡から数多く出土しています。

その起源については、ほかの農具と同様に大陸や朝鮮半島から伝来したという説がありましたが、最近の研究によって、弥生時代中期に吉備地方（現在の岡山県周辺）にあったものが、この原型となったことが判明しました。

吉備地方で出現したナスビ形農耕具は、古墳時代にかけて全国に伝播しました。その伝播ルートは大きく4つのタイプに分かれます。中でも日本海北上型は、山陰から日本海を北上し、北陸を経て、信州から北関東をとおり、東北（仙台地域）に広く分布するグループです。主に東北日本の日本海側から太平洋側にかけて分布するようです。

これまで新潟県域にはその分布が認められていませんでしたが、平成16年に南魚沼市（旧六日町）北沖東遺跡から3個体が発見されました。

鋤か鍬か!

鋤も鍬もどちらも土を耕したりする道具の一つです。鋤はもっぱら踏み込んで土を掘り起こすためのもので、柄と土に触れる部分の身が直線的にのび、スコップのようになっています。それに対して鍬は、打ち下ろして土を掘り崩すのに適しており、身に対して柄が70度ほどの角度で取り付けます。

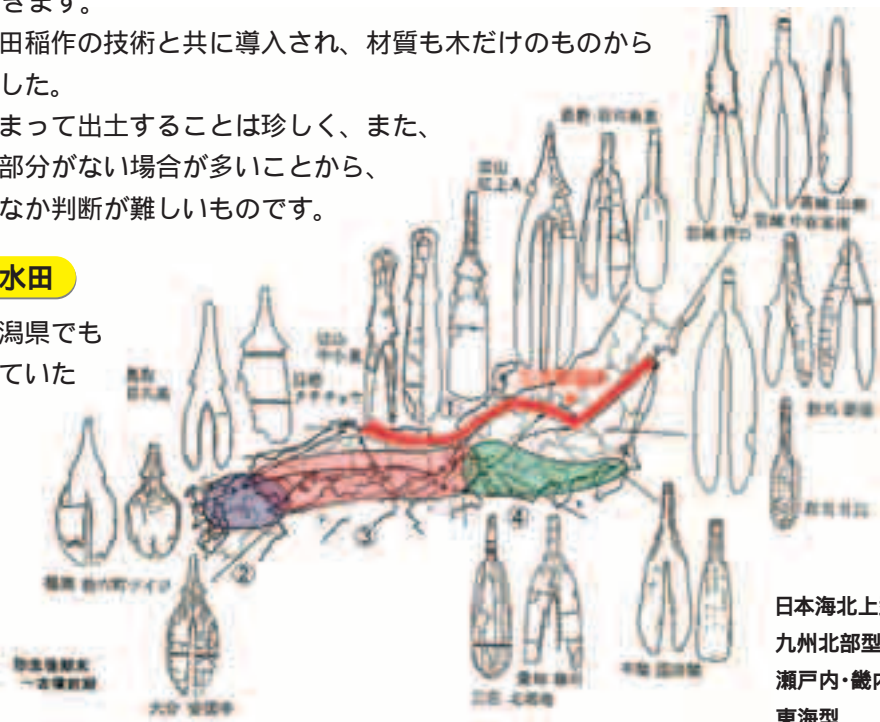
これらの道具は日本列島に水田稲作の技術と共に導入され、材質も木だけのものから鉄を用いたものに変化してきました。

柄とその先の身の部分がまともに出土することは珍しく、また、身も欠損して柄と接合する部分がない場合が多いことから、鋤であるか鍬であるかは、なかなか判断が難しいものです。

発見が期待される古墳時代の水田

これら農耕具の発見から、新潟県でも古墳時代には水田稲作が行われていたことが確認できました。

新潟県埋蔵文化財調査事業団で越後平野や高田平野などで、古代から中世にかけての水田を調査しています。今後、古墳時代やそれよりも古い弥生時代の水田の確認も期待されます。
（調査課資料担当：山本 肇）



北沖東遺跡出土
古墳時代前期の
ナスビ形農耕具

樋上昇1994「木製農耕具の地域性について」を一部改変

県内の遺跡・遺物55

佐渡金山遺跡（平成6年 国指定）

遺跡所在地：佐渡市相川広間町ほか

佐渡金山は近世におけるわが国最大の金銀山です。慶長6年(1601)に相川で金鉱脈の採掘が本格的に開始され、世に知れわたることとなりました。同年、幕府は佐渡を天領とし、幕府直営のもとに鉱山開発を進めました。最盛期は元和初期から寛永中期頃(1615～1634)で、出鉱高が10日で190tに達する坑もありました。

採鉱作業は湧き水との戦いでした。江戸中・後期になると浸水のため廃坑となる坑が増え、産出量も減少しました。明治維新後、政府は洋式の技術を採用して近代化を図りましたが、明治29年(1896)に民間に払い下げられ、平成元年(1989)まで操業が続きました。

周辺には関連する史跡と当時の人々の文化のあとが数多く残っています。

資料提供：佐渡市教育委員会



1 道遊の割戸

慶長の初め頃、人々はこの山の尾根や沢筋に露頭（鉱脈が露出した部分）を見つけ採掘を進めた。その結果、山が二つに断ち割られた。頂上部の裂け目の幅は約30mあり、佐渡金山のシンボルとなっている。



2 南沢疎水坑道

坑内にたまる湧き水処理のため、岩をくりぬいて掘った排水用のトンネルである。元禄4年から9年(1691～1696)のわずか5年間で、相川湾までの922mを鑿と才槌だけの手掘で貫いた。



3 大久保長安逆修塔

大久保長安は慶長8年(1603)に佐渡奉行に任じられ、直山制と呼ばれる直営形態で鉱山を經營し、開発の礎を築いた人物である。逆修塔は長安が自分の死後の冥福を祈って生前に建てた宝篋印塔である。

埋文にいがたNo 57

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市金津93番地1
TEL (0250) 25-3981
FAX (0250) 25-3986
e-mail: niigata@maibun.net
URL: http://www.maibun.net
印刷 阿部印刷株式会社